

# 新約聖書における〈カイン、アベル〉像について

## 赤 間 嗣 人

### 序

創世記四章の所謂〈カインとアベルの物語〉は、それが創世記の原初史においてどのような思想的意義をもつかという課題を提起する。これは旧約神学の扱うべき重要な課題である<sup>1)</sup>。一方この物語が後のユダヤ教文書、およびキリスト教諸文書の中にかに引用され、解釈されたかに興味をひきおこされる。この物語が、そして必然的にカインとアベルとが、ユダヤ教、キリスト教の信仰、思想にどのように関わってゆくかという問いの設定ができるのではないかと考えるのである。

〈人の国に属する悪しき者カインは、嫉妬に狂って、神の国に属する善き者アベルを殺害した〉とのアウグスティヌスの表現<sup>2)</sup>は、ユダヤ教および初期キリスト教におけるカイン・アベル像を集約した形をなしていると言えよう。

旧約外典、偽典、ラビ文献において、アベルは、最初の罪なき犠牲者、有徳かつ敬虔な愛義者、義人という称号を与えられた最初の殉教者として描かれ<sup>3)</sup>、対してカインは、貪欲なる罪人、邪悪な偽善者、神への反逆者とみなされている<sup>4)</sup>。このような〈カイン・アベル像〉が新約文書にどのように継承され、あるいは別な像が描かれたか、何故そのような彼らの像が描かれることになるのか、これを概観することをもって当面の課題としたい。これは安易な仕事であり得ない。またこうした観点そのものの意義が明確であるとも言えぬかもしれない。しかし新約の当該文書にみられる像の諸相とそれらの個々の特徴を描かせた教会の状況と著者の思想・信仰の関わりとの構造といったものを概観し整理できるとするならば、それなりの小さな意味があると考えられる。それ故、以下の記述はわれわれのたてた問いに就いての綿密な検討ではなく、問いそのものの意味を探る一試みである。

新約聖書における〈カイン・アベル〉への言及は、例えば族長たちのそれに比べて少なく、僅かに五つの文書中に六回なされるに過ぎない。マタイ福音書23<sup>35)</sup> (アベル)、ルカ福音書11<sup>50)</sup> (アベル)、ヘブル書11<sup>4)</sup> (アベル、カイン)、12<sup>24)</sup> (アベル)、ユダ書11 (カイン)、ヨハネ第一書3<sup>12)</sup> (カイン) がそれである。

以下、各書に現われた両者の像をわれわれの関心に基いて概観することにする。

#### 1. マタイ、ルカ両福音書におけるアベル

〈こうして義人アベルの血から、聖所と祭壇との間でああなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたがたに及ぶであろう〉(マタイ23<sup>35)</sup>。関連、ルカ11<sup>50)</sup>)

われわれはここに〈義人アベル Abel tou dikaiou〉という表現を見出す<sup>5)</sup>。アベルはまた、旧約に録された最後の迫害による死者ザカリヤ(歴代下24<sup>20-22)</sup>に至る殺された義人の最初の人物として描かれる。引用句には殉教者なる語はないが、註解者は一般に「殉教者」という冠を彼に与える。「聖書における最初の殉教者、兄カインに殺された義人」(A. W. Argyle)「ヘブル正典における最初の殉教者」(G. B. Carid)「アベルは最初の殉教者であり、信仰の英雄であった」(*Encyclopaedia of Religious Knowledge*)<sup>6)</sup>と。テキストの文脈によって、福音書記者が、神から遣わされた者の迫害による死を殉教として理解していることが判る。しかしアベルがなぜ義人であるのか、いかなる目的のために神から遣わされたとするのかについては沈黙している。それ故マタイ福音書の〈義人アベル〉の理解のためには、義人についての当時の一般的な見方を知ることと、本書を成立させている思想をか

えりみることが必要であろう。神の意志に服従する敬虔な人びとは、旧約の伝統のなかで *ṣaddiq* (義人) という代表的な語によって示される。この場合の義は神によって認められるものであり「神の判決によっておのが権利を擁護された者が、*ṣaddiq* (義人) なのである」<sup>7)</sup>。ヘレニズム・ユダヤ教においては *dikaïos* をもって「おのれの義務を神に対してはたす一方、同時にこれを神政的共同体の成員に対してはたす者……神の要求に答えて、神のみまえて義人と認められるにふさわしき正しさをみずから保有する者」<sup>8)</sup> とされ、ラビ文献ではこの傾向が最も強まり、義人とこれの対極である不義者の区分がはっきりと打ち出される。

「それによって、神のみまえておのれの義をもちとる人間の能力が、楽観的に評価されているのである」<sup>9)</sup>。かかる背景のもとに新約時代のユダヤ社会において *<dikaïos ↔ hamartōulos>* もしくは *<dikaïos ↔ adikos>* という概念的区分による系譜が存在し、社会層内にそれぞれに属すると目され、かつ自認する人々が在った。そのようなユダヤ社会における *<dikaïos ↔ asebēs>* という「相対的な適用ではあっても道德的な区別という通俗的な基準」があったことが指摘されている<sup>10)</sup>が、マタイ福音書がアベルを義人として記すとき、ただ伝統的な系譜を用い、また通俗的評価に依ってアベルを見ただけであるとは考えられない。6章、23章などの律法学者らに対する痛烈な批判の記事は、義の通俗的な基準を破って旧約宗教本来の意義に還る態度を示すものである。義人アベルの問題にしても基本的にこの立場を認めねばならないであろう。

マタイ福音書は、イエスの受難と復活を通してイエスのキリストであることを宣言し、彼に従おうとする者は十字架を負う覚悟を必要とすることを教える。福音書記者にとってイエスこそ旧約の完成者であり、イスラエルの歴史における義人の究極の姿である。23<sup>35)</sup>をイエスの言葉として設定するとき、この福音書記者は、アベル以降の義人の系譜に属するイエス、しかも義なるメシヤとしてイスラエルの全歴史を成就される方としてイエスを告白している。アベルはこのイエスを遙かに指差す者、イエスを究極の完成者とする *<義なる殉教者の系譜>* の先駆けとしての位置を与えられてここに現われる。それは創世記に瞬時あらわれて消えたアベルの、殉教の光栄を荷った再出現である。それはまた、この福音書記者の神学が描いたアベル像でもあった。

## 2. ヘブル人への手紙におけるアベル

＜信仰によって、アベルはカインよりすぐれたいけにえを献げた。そして神が彼の供え物により証言を与えられたので、それ（信仰）によって義人であると証言され、そして死んだ後も、今もなおそれ（信仰）によって語っている＞ (11<sup>4)</sup> 岩隅 直 訳<sup>11)</sup>

アベルが＜義人＞であることは前項の福音書と共通しているが、この文書の場合に特徴があるとすればそれは何であろうか。

緒論学が概ね示すところに依れば、本書簡はマタイ、ルカ福音書とほぼ同時代に成立しており、この時代のユダヤ人キリスト者の間に＜義人アベル＞像が定着していたとみられよう。更に著者が「ヘレニズムのディアスポラユダヤ教の神学的な、かつ正規の教義に精通していた」人物であり、「アレクサンドリア的教養を身につけた」ユダヤ人キリスト者であり、読者を「ローマの全集会内のあるユダヤ人キリスト者の群」であるとすれば<sup>12)</sup>、マタイ福音書のシリア地方成立説、ルカ福音書のローマ説などと併せて、地中海世界の広範な地域のキリスト者達の中に＜義人アベル＞像が認められていたといえよう。これに対して新約各書は各々の状況の必要性から独自の意義を与えてそれぞれの書に描いたと考えられ、ヘブル人への手紙においても特色あるひとつのまとまった＜アベル像＞を持つことになったと思われる。

本書簡が宛てられたあるキリスト者の群の中に、信仰と生活を混乱せしめる思想的危機の状況があり (2章、3<sup>12)</sup>, 6<sup>9)</sup>, 10<sup>32)</sup>, 12<sup>3)</sup> 等) 著者はこれに直面して「読者たちが、時代の圧迫に対し、かつてと同じく今も固く立ち、後退することのない態度を獲得すること」<sup>13)</sup>を目的として、神学的説教と実践的勧告よりなる信徒の教育を計っている。本書に展開される信仰概念をシュトラートマンは「ヘブライ人への手紙の著者が強調しようとするのは、信仰の対象ではなく人格的態度としての信仰である……この概念には、神の約束の肯定と、この肯定を未来にまで確かに貫徹する確固さという二つのものが入っており、この第二の要素を第一の要素と並んで強調している点が、信仰概念の特性にとり特徴的である」と解説する<sup>14)</sup>。ヘブル書はこのような確固たる信仰に立って生涯を貫いたイスラエル史上の尊敬すべき勇者達を列挙している。アベル、エノク、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、遊女ラハブ、ギデオン、バラク、サムソン、エフ

タ、ダビデ、サムエル、予言者たち、そして11<sup>35</sup> 以下には数多くの殉教者と迫害の苦難に遇った者達が名を掲げられることなく列記されている。旧約聖書以外のユダヤ教伝承をも含むこれら義人の系譜は、マタイ福音書の、アベル——ザカリヤの系譜に類似するものであり、このような敬虔な人々のリストが存在しており、本書の著者によっても用いられたものと思われる<sup>15)</sup>。本書簡のこの義人の系譜は、今や当然の如くアベルをその列の筆頭に位置せしめている。このこと自体はユダヤ教の伝統に添うものであろうが、著者がたんに形式上伝承を踏襲したにすぎないとは考え難い。11<sup>7</sup> によるとノアは＜信仰による義を受け継ぐ者となった＞と記される。ノアの dikaiosunē とは、彼をとりまく不信仰の世に対するノアの敬虔な全生活態度のゆえに、神から正しいと認承されたところの義である。重要なことは、その証言が既にノアに先立ってエノク、そして最初にアベルに与えられたと著者が理解しているということである。ノアはその相続人 (klēronomos) であると理解されている。アベルは義人の系譜の筆頭者であるのみならず、彼以降次々に継承されることになる義の証言を、最初に与えられた者として理解されているのであって、ここに本書簡におけるアベル理解の一つの重要な面があると考えられる。

マタイ福音書がただ＜義人アベル＞と記すのに対して、この手紙の著者は、何故アベルが義人と認められたかについて、創世記4章への独自の解釈からその理由を導き出す。彼の解釈の鍵語は＜信仰によって＞である。＜信仰がなくては、神に喜ばれることはできない＞(11<sup>6</sup>) という根本命題に基いて、アベルの供え物は神に受け入れられた、それゆえアベルは信仰をもっていた、と著者は考える。シュトラートマンは＜信仰によりアベルは、彼が正しいという証しを得た＞という著者の神学的論理をみごとに説明しているが<sup>16)</sup>、これによっても、すぐれて称讃すべきアベル像を著者が描いていることがわかる。

しかし＜その信仰のゆえに＞とヘブル書が述べる場合、信仰の内容は、少なくともアベルに関しては明確ではないと言わねばならない。アブラハム以下の人物については直接彼等の信仰が述べられ、エノクとノアの場合は＜神とともに歩んだ＞(創世記5<sup>23</sup>, 6<sup>9</sup>) という表現により間接的にではあるが神への敬虔があらわされる。しかしアベルについては＜血の声が土の中からわたしに叫んでいる＞(4<sup>10</sup>) という表現のみが僅かにそれらしく、註解者はここにアベルの信仰を見ようとする<sup>17)</sup>。地の中からの叫び声は神に報復を訴える声

であり＜生命の主＞である神への純粹な信仰の叫びであると解釈されているのである。(創18<sup>20</sup>, 申22<sup>24,27</sup>, 王下8<sup>3</sup>, ヨブ16<sup>18</sup>—特にエレ11<sup>20</sup>, 詩58<sup>10,11</sup>) しかし創世記9<sup>5,6</sup>, 列王下21<sup>19</sup>, 申命記32<sup>35</sup> などによれば、流血に対する報復は神自身の権利として保有されており、必ずしも血を流された者の信仰を前提としていないと考えられる例もあるのである。それゆえ、創世記のテキスト4<sup>10</sup> がアベルの信仰の証左として十全であると認められぬ限り、これによって彼の信仰を証することはできない。それゆえヘブル書著者の論拠はやはり彼自身のたてた根本命題、11<sup>6</sup> に戻って考えるべきであろう。著者は創世記の当該テキストのうちに、アベルの信仰を証明する客観的データを見出し、それに基いて11<sup>4</sup> を述べたのではない。むしろ、神がアベルと彼の供え物を顧みたという記事に対する著者自身の素朴な、しかし深く味い聞くべき信仰の論理から出た解釈であると理解されるべきであろう。

義人の系譜を整えること、彼等を称讃するそのことが著者の目的ではない。その系譜の最後の比類なき大祭司として自らを義の供え物として捧げたイエス、列挙されたものの頂点であるキリストを指し示すことこそが著者の意図である。それゆえ12<sup>24</sup> でイエスとアベルが明確に区別されていることに注目せねばならない。義人の系譜のみでなく旧約の全歴史が著者の救済史観において把握されているのであって、すべて究極的な神の摂理であるキリストの出来事との関連において見られている。更に言えばキリストの出来事に連なることにおいてのみ意義を持つのである。

### 3. ユダの手紙におけるカイン

＜彼らはわざわざいである。彼らはカインの道を行き、利のためにバラムの惑わしに迷い入り、コラのような反逆をして滅んでしまうのである＞(11節)

ユダの手紙の著者、著作年代、読者については諸説があるが、執筆の動機および目的は本書の内容からほぼ明らかであり(協会訳では、状況の急変による執筆内容の変更という切迫感を表わしきれていない)、かつ asebēs と指摘される者達の実態が具体的に述べられていることなどから、この書の背景として、一世紀末から二世紀はじめの異端、ことに萌芽期のゲノーシス主義をみるのが妥当であるといわれている<sup>18)</sup>。この時期、広範囲の教会に不敬虔な者 (asebēs) が潜入してきて、使徒的伝承による信仰から逸れ、キリストを否定し(4節)恣意勝手な誤れる思想ときわめて不道

徳な生活によって、諸集会のアガペを混乱させ<sup>(12)</sup> かつキリスト教信仰に似て非なる教えによって信徒を惑わしつづけた。かかる危機に対して、揺籃期にある正統信仰の教義と、信徒の生活のあるべき姿を守り、異端に対する反駁をなすことが本書の目的である。

本書における＜カイン＞像を理解すべく、当然のことながらかかる直接的背景を見る必要がある。さて、ユダヤ教の影響の下にあってユダヤ人社会には、人を *dikaïos* と *adikos* に分けする傾向があったことは前に述べたが、前者にはラビ、祭司、パリサイ人らが、後者には神の意志の具体的なあらわれとされた律法諸規定を遵守せぬ者があてはめられていた<sup>19)</sup>。ラビや宗教家たち、或は富裕な階層にあって律法を守り得る人々（マタイ 19<sup>16-22</sup>、ルカ 18<sup>9-14</sup>）は義人と敬われ、自らも自負していた（マルコ 12<sup>38</sup>）。彼等はイエスからその偽善性を厳しく批判されたわけであるが、しかし彼等はそれでも尚ユダヤ教の正統に立脚する者であり、批判者を逆に異端者として、神への不敬者として攻撃できたのであった。勿論「聖書の義は慈愛に対立するものではない。義は慈愛である。義というこの神中心の徳は、隣人に対する義によって、それは愛でもあるが、また社会正義によって言い表わされる」<sup>20)</sup> ゆえに、彼等の思考の方向と行動は、愛から、また義から遙かに遠いものであった。しかしそれにもかかわらず彼等いわゆる義人たちは、神を冒瀆するつもりなどは毛頭あり得よう筈はなかった。しかるにこの手紙において著者と被批判者の関係は、福音書のその関係とは全く趣を異にしているのである。ユダの手紙では *asebēs* について独特の非難がなされ、＜カイン＞像はこれとの関連において描かれていると考えられる。

著者は、旧約聖書の中から、神に反逆し、神を捨て、決して許されることのない不道徳を敢て為した者達についての三つの事例を集会の人々に示し（民数記 14<sup>26-38</sup>、創世記 6<sup>1-4</sup>、19<sup>1-25</sup>）これと現在問題となっている *asebēs* とを対比する。集会に潜入した異端の教師、および彼等に惑わされる者達は、かつて完全に滅ぼされ、永遠の火の刑罰（*dikē* 7 節）に定められたこれらの人間たちと同列にある、と著者は断定する。異端の教師たちが *asebēs* と言われるとき、バラキヤやコラに類する彼等の不道徳そのもののふるまいに対する非難とともに、そのふるまいを発せしめているところの、使徒的伝承に基く信仰から逸脱した思想の誤謬そのものが反駁、排撃されねばならなかった。「彼らは恐らく後代のグノーシス思想家と同様、最高神と世界の創造神とを区別し、その結果、唯一の真の神に心

からの畏敬を払わなかったのであろう」<sup>21)</sup> とシュナイダーは推測している。ユダの手紙は、直接的には彼等のグノーシス主義的誤謬に対する神学的反駁という形式をとらず、旧約聖書のよく知られている事例の教訓に照らして、偽教師の生活の墮落を衝くことによって信徒たちの覚醒を求めるという方法をとっているが、著者の根底には＜最も神聖な信仰＞（<sup>20)</sup>）を歪める異端思想に対するラディカルな激しい闘いの姿勢があるのであって、旧約の事例の解釈はこの立場からなされているのである。

本項冒頭の引用句にみるように、異端の教師と彼等に追隨する者達は、＜カインの道＞（*tēi hodōi tou Kaïn*）行く者とされる。この表現は聖書中ただ此处だけにみられるものだが、内容的には特殊なものではなく、旧約以来の重要なモチーフである＜二つの道＞のひとつ＜悪しき者の道＞（箴言 4<sup>14</sup>）と同義であり、＜正しき者の道＞（箴言 4<sup>18</sup>）、＜神の道＞（使徒行伝 18<sup>26</sup>、マルコ 12<sup>14</sup>、ヘブル 3<sup>10</sup>）に対立する用法であろう。前者は利己心によって他者を顧みないふるまいを続ける者（ユダ 12, 16, 18, 19）すなわち *adikos*, *asebēs* の道であり、後者は神の求めるふるまいを貫いて神に至る者、すなわち *dikaïos* の道である。

著者はカインの名を挙げるについて、最初の殺人者としての彼の残虐行為を問題として異端の教師に結びつけるというより、ユダヤ教のカイン伝説にある利己主義的な人間の典型としてのカインに視点を当てているように思われ、モファットもそれを指摘している<sup>22)</sup>。しかし *asebēs* に向けられる著者の批判は、ただ彼らの外にあらわれた行動に対するものと限るべきではない。＜彼らには、まっくらな闇が永久に用意されている＞（<sup>13, 9</sup>）という表現は、彼らが特に区分された悪人のための死者の住居に永久に留め置かれるべき存在であることを示しており、これはヨハネ文書に即して言えば＜死に至る罪＞（ヨハネ第一の手紙 5<sup>16</sup>）に彼等が該当することを意味している。本書にあらわれる *asebēs* は、正統信仰を否定する者達であり、著者は根本的にこれと闘うのである。

著者は伝統的な *dikaïos* ↔ *adikos* の対立構造のうちにカインを捉えつつも、たんにその性格的、道徳的弱点を問題にするのではなく、キリストを否定し、神を冒瀆する不信仰な者の範ちゅうに属し、しかもその最初の人物として位置づけるのである。ここに、異端問題という新しい難事が起るとともに、カイン像がそれとの関連で変化していることを見ることができると考えるのである。ユダの手紙における独特の＜カイン＞

像であると思うゆえんである。

#### 4. ヨハネ第一の手紙におけるカインとアベル

＜カインのようになってはいけない。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである＞ (3<sup>12</sup>)

(カインを中心に述べる)

新約聖書中おそらく最も後期に属する文書の一つである本書に兄弟の事例が挙げられる際、われわれはいかなる＜カイン・アベル＞像を見ることになるであろうか。前項のユダの手紙と同様に、この論文形式に近い手紙は一世紀末、萌芽期のグノーシス主義、殊にキリスト仮現説に類する異端思想を論駁することを目的とした状況文書であるとされている。著者は、特徴といわれる二元論的思想、用語法によってこの異端思想を論破し、キリスト教徒に適わしい生活全体を通して、正統な信仰を証しするべきことを勧告する。伝統的な＜dikaïos↔adikos＞の区分はこの著者において＜神の子ら ta tekna tou Theou＞と＜悪魔の子ら ta tekna tou diabolou＞の不可越対立という二元的構図で表わされる。かつて、ユダヤ教の内部でひとつの教義に基いて行なわれた区分は、キリスト教信仰と相容れない異端思想との対決というあらたな事態の中で、従来とは全く別な視点からの区分をつくり出していると考えられる。すなわち、キリスト教信仰か異端思想かの二者択一の視点である。

それぞれの側に属する者を、やや図式的になるが区分し要約すると次のようになる。

##### 神から出た者

- イエスがキリストであると信じる (5<sup>1</sup>)
- イエス・キリストは全世界の罪のための贖いの供え物であると信じる (2<sup>2</sup>)
- イエスが肉体をとって来られた事を告白する (4<sup>2</sup>)
- 神のみ旨を行う (3<sup>7</sup>)
- 彼は永遠にながらえる (2<sup>17,25</sup>)

##### 悪魔から出た者

- イエスがキリストであることを否定する (2<sup>22,23</sup>)
- イエスが肉体をとって来られたことを告白しない (4<sup>3</sup>)
- 義を行わず兄弟を愛さない (3<sup>10</sup>)
- 全世界を彼らの支配下においている (5<sup>19</sup>)

- 彼の裡に永遠のいのちはない (3<sup>14,15</sup>, 5<sup>12</sup>)

上の対比に、教会内に起りつつある反キリストの危険と、これに対する教会の思想的、実践的闘いの厳しさおよび著者の立脚点と決意がうかがわれる。この要約にみる如く、両者の区別は判然としているが、著者はこの区分の基準を、2<sup>3-6</sup>, 3<sup>7-10</sup> に述べている。

その執筆目的と方法において、本書簡は前項のユダの手紙と同傾向にあり、異端思想への直接的反駁によるよりは、彼らの生活実態への批判を前面に出すことに意を用いている。本書の場合、視点は、その者が神のみ旨 (thelēma) に従う生き方をしているか否かに注がれる。「主の祈り」に代表される＜神の意志＞は、ユダヤ教において普通に用いられる概念であるが、キリスト教会においても重視されている。(マタイ21<sup>31</sup>, ヨハネ5<sup>30</sup>, 行伝13<sup>22</sup>, ロマ12<sup>2</sup>, ペテロ前3<sup>17</sup>等)。thelēma の内容として著者は＜神の子イエス・キリストの御名を信じ、互いに愛し合うべきこと＞ (3<sup>23</sup>) を示している。これは同時に本書における dikaïos の内実でもある。神に属する者の信仰的・倫理的必然として教会員への愛を結実せしめられること、世俗の欲望にとらわれて兄弟への配慮と責任を果たさぬ者は adikos であることを著者は論ずる。

かくて、神の thelēma に背馳する者の典型としてカインがとりあげられ、アベルはその反対像たることを読みとらせられる。

本書簡には旧約聖書からの引用は一度も無く、カインとアベルへのこの言及が唯一の直接的な旧約聖書との関連である<sup>23)</sup>。カインの名の出現はその意味で唐突でさえある。しかし読者の間に「カインとアベル」の物語がよく知られ、しかも＜兄弟殺し＞＜不義者＞として、悪しき者の系譜の筆頭たるカイン像が定着していたであろうことを想定すれば、著者の論証の意図にとって適わしい言及であるといえよう<sup>24)</sup>。ブルトマンの言う愛の対型としての憎しみのモチーフが、この兄弟を旧約から呼び出したのである。

著者の峻厳な信仰の論理において、「愛さない」という在り方は、ただ現状に留まるという静的状態というのではなく、＜憎む＞ことと同義であり、憎む者は即ち＜人殺し＞であって悪魔の子であるという事を意味する (3<sup>15</sup>)。この論理構造のなかで、カインは＜悪魔から出た者＞ときめつけられる (3<sup>8</sup>)。ek tou diabolou estin の einai ek について、ブルトマンは「起源だけでなく悪魔的な力によって支配された者をも意味する」<sup>25)</sup>と説明し、シュナイダーもまた「その

存在の源は、神に敵する者——その本質が罪であり、それゆえ始めから、つまりその存在の始めから神に敵対し、今に至るまで悪魔的な力を繰り広げている者——にある」<sup>26)</sup>と解釈する。しかしシュナイダーが「彼は悪しか行いえないほどに、徹底的に墮落していたのである。自分とは反対に義しい、すなわち神の求めたまうところに適ったわざを行った兄弟を憎むに至った源はそこにあった」<sup>27)</sup>としてカインの本質が罪であり「悪を行う者から出た」<sup>28)</sup>と強調するのは、やや解釈を進め過ぎてはいまいか。むしろブルトマンが指摘するように、(ある状況の中で)悪魔的な力に支配されて罪を犯した者と理解したい。

いずれにしてもカインを悪魔的な勢力との関わりで把える本書の思想は、新約のこれまでみてきた文書にはみられない特徴である。

本書のカイン理解は、後の教会教父の著作にも見受けられ<sup>29)</sup>、表現の類似と共に、それら教父文書の背景をなす教会の状況が、ヨハネ第一書の状況の延長上にあることを思えば、かかる<カイン>像形成の必然性というようなものを感じて興味深い。

本書におけるカインは、ただに adikos の系譜の筆頭人であるにとどまらず、その在り方を diabolos に束縛されたところの、従って他者と共に生きるべき自己を放てきし、他に犠牲を強いて己を建てようと企てた者である。かかるカイン像はしかし、彼を支配した悪魔的な勢力とともに、dikaios なるイエス・キリストによって究極的に打ち勝たれるべきものとして描かれる。教父の一人が冷静に現実を直視した如く<sup>30)</sup>、彼等の支配は世界を覆っているが、困難の中にも勝利を確信する著者の神学が描いたカイン像であるといえよう。

## 結 び

後期ユダヤ社会には<義人><不義者>という概念区分があり、それぞれの側に属するとみなされる伝説上の人物を含むイスラエル史上の人物の系譜が存在していたと推測されている。アベルとカインはそれら系譜の最初の者として定着していた。この伝統的<兄弟像>は、新約文書において、各文書が成立せねばならなかった事情と、著者および彼が属する信仰共同体の神学とが要請するところの意図的かつ独自の解釈を経て継承されたと考えられる。その結果、伝統的<兄弟像>は、エルサレム教団のユダヤ的色彩またユダヤ教との関係、地中海世界に進出した際のヘレニズム思想の影響、ローマ側の迫害という三種類の状況と密接に

関わりながら、それぞれの文書の中で独自の解釈を加えられ、特色ある像に形成されていったものであると結論づけることができよう。その要点を再言するならば、1. ユダヤ教との関わりで、教会が真のイスラエルであり、イエスこそが待望のキリストであることを主張する立場から、アベルは義なる殉教者の系譜の究極の完成者であるイエスを指し示す先駆けとして描かれた。

2. 二代目のキリスト者に対するローマの迫害に際し、確固たるキリスト信仰を持続させるために、範としてアベルが引証され、義人の系譜の最後の比類なき大祭司イエスを指し示す者として描かれた。

3. 公同書簡においては、初期グノーシス思想を中心とする異端との関わりでカインがとり扱われる。ここでは不義なる者はユダヤ教的視点を離れて、キリスト教信仰か異端思想かという観点で問題にされ、カインはキリストを否定し悪魔の勢力に支配された異端の教師に連なる<不信仰な者>の系譜の筆頭者として描かれた。以上概観したように、キリスト教が進展する過程において経験しなければならなかった重大な局面ごとに、<兄弟像>があらたに問題にされ、護教と自戒のための役割を荷わされているのである。

新約聖書にみられる<兄弟像>形成のこの傾向は、後期ユダヤ教文書、初期キリスト教文書においてはどのようにあらわれるであろうか、興味をひかれるが次の課題としたい。

## 註

- 1) クラウス・ヴェスターマン『創造』西山健路訳新教出版社1972はこの課題につき示唆に富む見解を提示する。
- 2) アウグスティヌス『神の国』15篇1, 5 J. W. C. ワンド編出村彰訳日基教団出版局1968。
- 3) *The Jewish Encyclopedia* Vol. I, pp. 48-49.
- 4) *Ibid.*, Vol. 2, pp. 493-495. 『エノク書』22<sup>7</sup>, 85<sup>3-6</sup> 『ヨベル書』4<sup>1-5</sup> 『ソロモンの知恵』10<sup>3</sup> ヨセフス『ユダヤ古代誌』I, 2, §1
- 5) 聖書に於ける義については主に次の書物に依った。Norman H. Snaith: *The Distinctive Ideas of the Old Testament*, SCHOCKEN 1964, キッテル新約聖書神学辞典『義』教文館1970
- 6) A. W. Argyle: *The Cambridge Bible Commentary on the N. E. B.*, The Gospel According to Matthew, G. B. Carid: *Saint Luke*, The Pelican N. T. Commentary p. 159. Alfred Plummer: *I. C. C., St. Luke* p. 314. W. C. Allen: *I. C. C., St. Matthew* p. 250.
- 7) キッテル前掲書24頁

- 8) キッテル前掲書49頁
- 9) キッテル前掲書50頁
- 10) キッテル前掲書59頁
- 11) 岩隅 直訳註『ヘブライ人への手紙』山本書店1974
- 12) 中川秀恭『ヘブル書研究』創文社 N. T. D. 新約聖書註解9『ヘブライ人への手紙』1975, H. シュトラートマン, *The Interpreter's Bible*, XI等による。
- 13) N. T. D. 『ヘブル人への手紙』301頁
- 14) 上掲書 300 頁
- 15) 上掲書308頁, 317頁, IV マカベア18<sup>11</sup>
- 16) 上掲書308~309頁
- 17) 中川秀恭前掲書 296 頁  
シュトラートマン N. T. D. 前掲書 330~331頁  
Alexander C. Purdy: *The Epistle to the Hebrews* (Interpreter's Bible), p. 748.
- 18) 荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店 1971 30~42頁  
ルドルフ・ブルトマン『新約聖書神学』I 川端純四郎訳, 新教出版社 1963 207~216頁  
ヨハネス・シュナイダー『ユダの手紙』N. T. D. 新約聖書註解10 松本武三訳1975 269~273頁  
栗原貞一『初期キリスト教異端思想の諸相』キリスト新聞社 1973 125~132頁
- 19) 荒井献『イエスとその時代』岩波書店1974 39頁
- 20) クロード・トレモンタン『ヘブル思想の特質』西村俊昭訳 創文社 1963 214頁
- 21) シュナイダー 前掲書 290頁
- 22) James Moffatt: *The Moffatt N. T. Commentary, The General Epistles*, 1963, p. 238.
- 23) Rudolf Bultmann: *The Johannine Epistles*, Fortress Press, 英訳1971, p. 54, p. 3.
- 24) A. E. Harvey: *The New English Bible Companion to the New Testament*, Oxford Univ. Press, Cambridge Univ. Press, 1970, p. 767.
- 25) R. Bultmann: *op. cit.*, p. 34.
- 26) シュナイダー 前掲書 352頁
- 27), 28) シュナイダー 前掲書 357頁
- 29) *Epistle of Ignatius to the Smyrnaeans*, Chapt. 7. *Theophilus to Autolycus Book II*, Chapt. 29.
- 30) スミルナ人への手紙においてイグナティオスは<不服従の子等>の中に現在も働いて、信仰を無くさせようとする悪しき霊の存在をきわめて現実的に認める。彼は、カインを含めてその前後の長い歴史の間に人間を神から引き離そうとする悪魔的な力が働いたが、それは現在も、今後も教会に及ぶであろうことを認め、それに抗すべきことを極力教える。